

涙もて祈るダビデの懺悔こそ

我胸を打つたましひを打つ

椽側に積木の城を築き上げ

兒等手を打ちて喜べる春

母と共にちさき城主が築きける

積木の城を吹く春の風

フリジヤも春の生命の脹らみを

見せてほ、笑む三月の風

そのかみの聖者のすがた其の儘に

祈るは白き石膏の像

目醒むれば我兒はあらず驚ける

母が目に浮く雪達摩かな

物耽りふどのはづみに氣附きける

指の小爪を噛むくせの我れ

九條武子夫人の靈に

此世なる聖き白蓮おほいなる

一輪散りてみほどけの座に

君がため蓮玉の御座ととのへて

らでんの扉しづやかにあく

寂光の淨土に生くる君やいま

彌陀の光りに圍まれて笑む

沙羅の花、生者必滅會者定離

さてもかなしき君が涅槃（以上）

いみじかる理想はてなく胸に萌ゆ

五月（以上）の空に湧く雲に似る

春の日を石をたたきて降る雨よ

かたくな人に似て淋しけれ

親を棄て故郷を棄てわれを棄て

只主に生きし我れなりしかな

聖き道我が來し方も行く末も

この一線に天に連なる

天王寺彼岸まゐりに言ひかづけ

春を歌へる酔興の人

若草に静かにけふる春の雨

少女が描くまぼろしに似る

父の靴ちいさき足に引ずりて

漫書の如く春を遊ぶ兒

アダム、イヴ、エデンの園を追はれて来て

亦春を見ず淋しからずや

世はかなし泣くべき時に笑みてある

斯かる矛盾の堪へがたきかな

我が世界いまぞ來ると告ぐるごと

春にかがやく白き木蓮

夏のくも巨人に似たる足どりに

天の涯をばゆるやかに行く

どこしへに緑の空をしたひつゝ

黙しつ思ふ夏の海原

人の世に萌ゆる醜草刈らんとて

集り叫ぶ火の女かな(廢娼演說會にて)

我もまた喜劇の役を買はされて

公會堂の演壇に立つ

幾千のひとみに迎へらるゝ時

花道に立つ心地こそすれ

男いふ汝れは女ぞ低かれど

男子高しと誰がさだめけん

女をば低しとなせる男子等よ

鳥かたすの雌雄知るや知らずや

火の言葉火の女より洩るゝとき

急霰のごと降る拍手かな

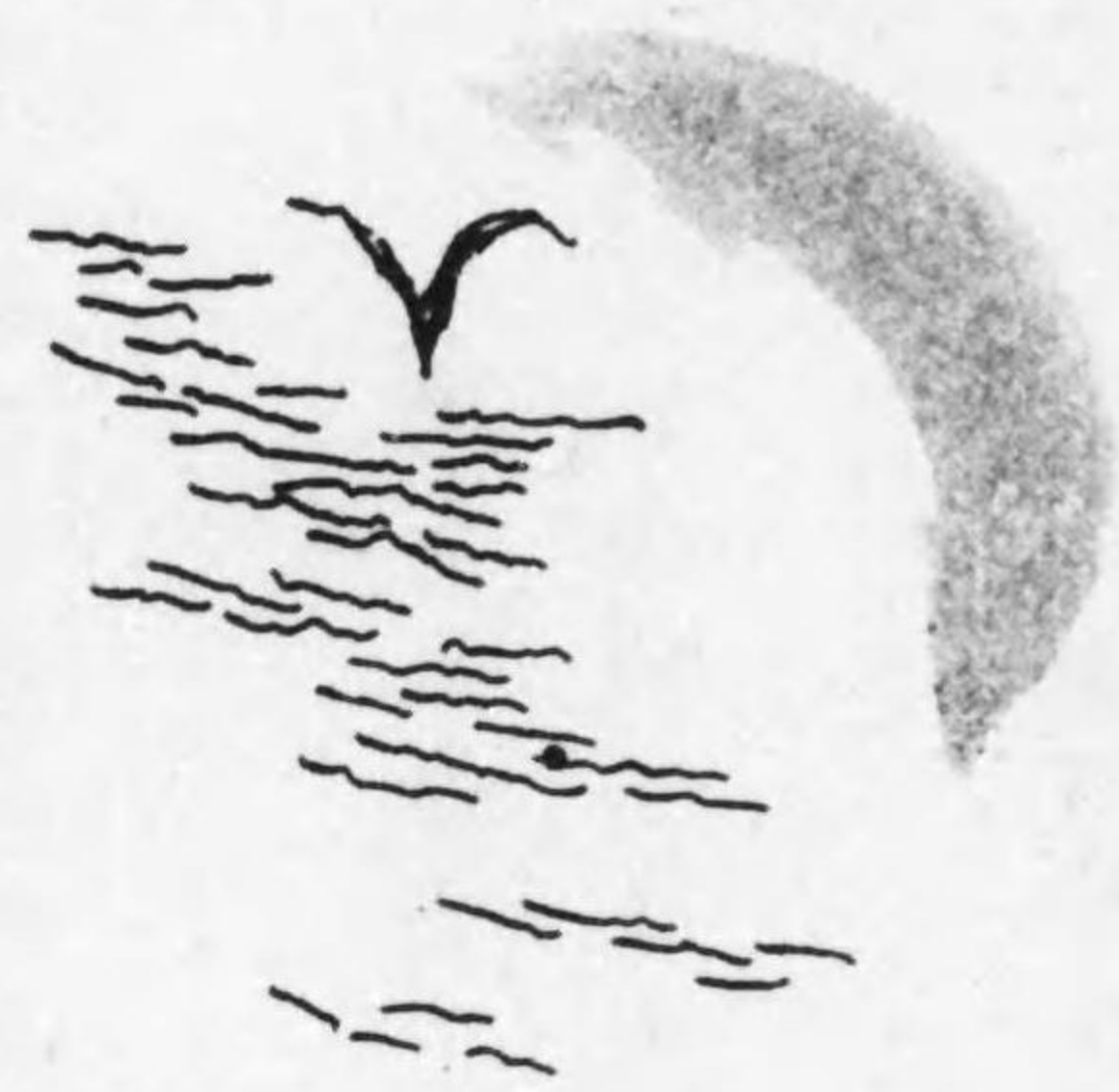
美しき緋房の籠の鳥となり

内に泣けよと言ふは誰が子ぞ(以上)

朝澄みの瑠璃の空よりしたたれる
生命に燃ゆる我が靈の秋

底澄める秋の深さよたましひは
無限の二字に觸れて高鳴る

秋動く誰がしつらへし水晶の
宮殿を美しくも此こころ住む



たえてみぬ
幾年ぶりの
世界地図
ひろげて君が
船のあと追ふ

萩桔梗咲けば虫来てちちと鳴く

しみじみ秋を刻みてぞ鳴く

限られし生命の中にちからをば

傾けて鳴くこほろぎの聲

一筋も身のかたはれと思ふとき

秋の抜け毛も淋しからずや

高野山に登りて

たましひの郷さきに法土の暗示まきしをば

受けんと杖を高野にぞ引く

時と世は流れてカフエー女給など

女人にん禁止の山にはびこる

しかすがに床しく響く寺々の

勤行けんぎょうの鐘我が胸を打つ(以上)

弄なまられて手足ちぎれて亡び行く

京人形は淋しからずや

美しき舞妓の末路すえよ玩具おもちゃにも

似て亡び行く人形の女ひと

春は來ぬ我がたましひの底ひより

生命の泉おと立て、湧く

玉霰れ窓にはじけば短氣人が

卓を叩ける様もおもほゆ

絶望の吐息かなみだ枯れし子の

嘆きか高し工場こうじやうの笛

我にして我ならぬ日の二日三日

ありて空虚くうその魂を見つむる

春の風秋の風吹く一瞬の

氣紛れごころ火たり水たり

呼び歩く屑や豆腐や納豆うり

生きんがための人間の聲

新らしき不死鳥となり新らしく

強く羽ばたけ春の大空

愛の花いのちの花の開くおと

胸に我れ聞く復活の朝

春の風羽化せし身をば乗せて吹く

此ごろの我れ魔術師に似る

大いなるみ手の業かな裸木も

見よ金銀のたまの芽を吹く

紅椿はるの小雨にわななきぬ

懺悔の尼のまなざしに似る

春なれば夢も美しくれなるの

夢幻の塔を建て、我れ住む

さくさくと玉砂利道を踏む音も

心にはじく三月の朝

行人に踏みにじられつ沈黙の

すがたなつかし蓮華草さく

天地に満ち足らひたるおん恵み

春の光りは街路樹に照る

春姫が陽にぬぎ捨てし被衣かや

見よむらさきの雲の一群れ

大和川堤防に立ちて紫の

春の雲見て心足らへり

我が胸に我れにさからふ王国の

三つ四つありて統べ難きかな

ペン投げて日向に出で、振子張る

氣紛れ心春の風吹く

子がたゞく破れ太鼓の音に似る

歌のはづまぬうつろ心は

浮雲に似し富なるを地位なるを

王冠のごと争へる子等

木の馬に乗りし得意の子を見れば

ドン・キホーテが事も思はる

花祭り花に埋るゝ星の子よ

オリオンの座を地上に見るごと

新らしき響きを胸に投げかけて

我が前に笑む白百合の花

宇宙の謎を壁の裂けめに咲出でし

花に解けよとテニスンと言ふ

祈りつゝ我れ涙ぐむ其のさまに

白く光れる初夏の雲

とこしへに春を失ひ我が前に

くづれて泣けるチューリップかな

一齊に力を出し枝毎に

黄金の芽を吹く初夏の風

昭和四年九月廿五日印刷
昭和四年十月一日發行

不許複製

(定價金壹圓二十錢)

著者 錦織くら子

發行者 西阪保治

印刷者 關谷紋次

發行所

大阪市浪速區
貝塚町一七地

日曜世界社

電話替穴一六七四番
九九五番

大阪活版印刷所發行

終

